
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ あなたはその時何を思う? ~

八十神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～あなたはその時何を思う？～

【Nコード】

N4673V

【作者名】

八十神

【あらすじ】

「お前はその時何を思う？」

真実を見定めるためにオレは行く。

人間の真実が、人間の本性が…

善か悪か、どちらかを――

三部構成から成る長編SS！

第一部、善編、開幕！

開始の始まり

誰でもいいから、オレに教えてほしい。

『悪』とは一体？

『善』とは一体？

復讐をする事が本当に悪いのか。今にも死にそうで、苦しんでいる人に対して無責任に「生きる」と呼び掛けるのは正しいのか。

…オレからしたら、ない（・・・）。

そんな中途半端な正義感を誇りかぶっている奴がいたら、多分オレそいつをブン殴っている。

理由は簡単、その行為は『悪』でもなく『善』でもなく。

最も最悪で、オレ嫌悪する行為、『偽善』だからだ。

………まあ、自論述べても仕方ないけど、オレがこんな事を考えるようになったのは理由がある。

小さい頃、こんな出来事があった。

その日、天気は雨で傘をさしていても無意味なくらい豪雨で

オレがビショビショの状態で学校から帰宅していると、道の片隅に何やら動く物体が置いてあった。

好奇心で近づいてみると、そこには一匹の猫が段ボールの中で蹲っていた。

寒さに耐えきれないのか、まだ体温調整が出来ないのか、子猫は小刻みに震えている。

雨は当分止む様子ではないし、この豪雨の中外に出ているのはオレくらいのものだ。

つまり、この子猫はもう助からない。

そう決心した時

オレは、

猫を抱き抱え、

『……………さよなら』

脆く、細い首を折った。

ポキッと、猫の首は木の枝のように簡単に折れた。

子猫は一瞬にして動かなくなり、力なくオレの手から滑り落ちる。

『……………』

謝罪の言葉はない。

すまないなど言つつもりなら、最初から殺すわけがない。

だから、オレが言ったのは別れの言葉のみ。

誰もが見ても衰弱しきった状態だった。

死ぬのは時間の問題だった。

じゃあ、せめて、楽に死なせてやるくらいはたっいていい。

なのに。

なのにこの大人達と来たら。

オレがした行為の一部始終を見ていたのか、そろそろと近所の奴ら出てきて叱ってくるのだ。

『命を粗末にするな』

『どうして殺した。助かったかもしれないだろ』

『こんな小さな猫を殺すなんて、あなたは最低よ』

……………。

おい。

おいおい。

お前たちは達は何を言っている？

少なくともあなた達のほうがこの猫の存在に気付いていたはず。

命を粗末にするな？ 助かったかもしれない？ 殺すのが最低？

…無責任な。

お前達は…あなた達はこいつを見ても何とも思っただけだった。

なのに何だ？ いざオレが殺すと『可哀想』だの『苦しかったよね？』だの。

本当はそんな事全く思っただけじゃないのだろう。

そんな気があるなら、なぜ助けなかった。なぜ見捨てた。

自分が正しいとか思っているのか。

今の自分の行為は正しいとか思っているのか。

………違つ。

あなた達は正しくない。

オレも正しくない。

だが、オレとお前たちの違いは一つだけだ。

それは、自覚があるかどうか。

正しをやっている気分になれる。

人はそれを…『偽善』と言うのだ！

……………。

……………つまり。

世の中は偽善で溢れている。

溢れ過ぎている。

だからオレは思う。

偽善者の本性：化けの皮が剥がれる瞬間を見てみたいと。

どんな滑稽な顔をするのか、見てみたいと。

だから、

オレは今までいた部隊を辞めて、

機動六課に行った。

この者達の信念が『善』か『悪』か。

それか『偽善』かどうかを見定めるために。

第一話 彼と相棒（前書き）

なのは達はまだ登場しませぬ

第一話 彼と相棒

「や、やめてくれ…俺は金なんか持ってねえんだよっ」

「うるせえよ、ならその着てるもん全部脱げや糞豚が」

一人の小太りの男性が、図体のいい男に絡まれている。誰が見ても明らか、カツアゲだ。

まだ外は昼だというのに、堂々と道の真ん中でそのような行為をしていては人目についてしまうのは仕方がないのだが、

「そんな…じよ、冗談でしょ？」

「だったらよかつたな。お兄さん？ ここではお前さんみたいなお坊ちゃんが来る場所じゃなかったんだよ。観光か興味本位かはシラネエけど、もうここからは出れないと思った方がいいぜ？ なんせここは世界のなれの果て…管理局にも見捨てられた世界なんだからなあ！ ギャーハハハッハハハ！！」

「嘘…だろ？」

男性の顔がみるみるうちに驚愕の表情に染まる。この世の終わりを見たように。

仕方がないだろう、何せいきなり見ず知らずの男性に『もう帰れない』と宣告されたばかりなのだから。

「い……いやだ……家に帰りた……帰って、母さんの手料理でも食べて
いたい……誰か……誰か助けてくれ……！」

男が叫ぶが誰も振り向きはしない。それ以前に彼らなぞ視界に入っ
ていないようにみえる。まるでこの行為が日常茶飯事のように。

「……………」

「……………」

「……………」

彼らを見る者は一人も居らず、皆虚ろな目をしていて道を歩いてい
る。

服が破け、ほぼ裸に近い中年男性。

お金をせがむように空き缶を持って声を掛けている子供。

道の隅で何か呪文のような言葉をブツブツ呟いている女性。

ああ、悲鳴がこだましている。また誰かが死んだのか、とある窓か
ら男性が一人飛び降りた。

六階という高さから飛び降りた男性は、そのまま重力に従い地面へ
と引つ張られていき、コンクリートに赤黒い花を咲かせる。

でも誰も反応しない。あまつさえその男性の衣服を回収しようとす
る輩もいるくらいだ。

ここではそんな事が普通。日常茶番事。
皆狂っている。

そう、この世界にはそんな人間しかいないのだ。

弱肉強食。弱い者は死に、強い者だけが生き残る。日本のことわざ
である言葉だが、まさにこの世界はその象徴と言えるだろう。

第 管理外世界、通称『世界の終わり（ワールドエンド）』

この世界は管理局に見放された世界である。

その治安の悪さは他の世界の比にならないほどで、一度この場所へ善意で視察に来た管理局員がいたのだが、ここに着くや否、ありとあらゆる暴力、罵倒、憎悪を受け、その世界を出る頃には体も心もボロボロにしたほど。

この世界の住民は狂っている。

しかし、彼らからすればこれが普通。

暖かい食事？ 安らげる家庭？ 休める寢床？

そんな物を彼らは知らない。知るわけがない。

彼らは知らない。この世界以外の存在を。

彼らは知らない。幸せという感情を。

そんな絶望的……いや、普通の状況にもし、あなたがいたのなら。

あなたそこで何を思う？

これはそんな物語。あなたのいる今の環境がどれだけ贅沢なのかを教える物語。

彼らをどう思っただろうか？ もし、ここで可哀そうなどという感情を抱いた者がいるのなら

「それは憎むべき事、だ」

……………。

今ここにも、この世界の住民がいる。

こんな狂った世界に似合わずフードを目元まで深く被り、その顔は

よくわからない。ただ体格、声からして男性という事は判明する。

「……………」

男は歩く。時々ぶつかつてくるスリ目的の子供を相手にしながらも、ゆっくりと進んで行く。その足取りは妙に緩やかで、足音は耳を澄まさないと聞こえないほどに。

「…………ふむ」

少し小さいビルの間の路地に入っていく、奥まで進んで行くと、そこには数人の人だかりが出来ている。

男はその姿を遠目で視線を、辺りに落ちている（……………）人間達に向ける。涎を垂らし、無気力に壁からだらけている人間がそこにはいた。目は虚ろで、焦点が定まっていない人間達。

「ふ……」

そして、その姿を確認して鼻で笑うや否、その集団に近づいていった。

「んあ？　なんだ、おめえ？」

集団のリーダーだろうか、茶髪の男がこちらに気づいた。男は反応せずにその場に立ち尽くす。

茶髪の男性は多少警戒しながらフードの男に近づく。

「ここはあんたみたいな黒装束着てるが入つていい場所じゃねえーんだよ。ほら、さっさと帰りな。女神か救世主ヘイムにでも祈メシヤって明日が迎えますようにってな」

「……………」

「てめえ…出ていけっつーのがわかんないですかー？」

痺れを切らしたのか、額に青筋を立てながら茶髪の男はフードの男に詰め寄るが、

「…この…」

「あ？」

「『この天気はいいですね』」

「……………」

フードの男は口元を上げながら意味不明な事を言う。この世界の天候は良くなり、一年中曇りのような暗さだ。お世辞にもいい天気とは言えない。植物さえ、まともに育たない環境なのだから。

「…ああ〜、へへっ」

しかし、その言葉に茶髪の男は反応し、次の瞬間にはニカッと笑った。

「〜なんだ〜お客さんだったのかよー。ならさっさとそう言ってくれりゃあよかったのよーったく。んで、あんたは何が望み？」

急に馴れ馴れしく、茶髪の男がポンポンとフードの男性の肩を叩くが、男は動じず質問を続ける。

「何があるのだろうか？」

「ん？ あー、Sサイズ、Mサイズ、Lサイズ…ああ、Kも…あとは…」

SやMというのはサイズの事ではない。これはここの業界で言う薬物…つまり、麻薬の事だ。管理局のないこの世界で別に隠す必要はないのだが、それゆえに犯罪は多数起こる。なのでこうした薬物もコソコソと裏で販売しなければすぐに強奪されてしまう。

「…アル…」

「あ？ なんだっせ…うお？」

ゆっくりと、男はフードから目を覗かせる。その双眼を見た時、茶髪の男性は少し震え上がる。

「おめ、その目は……」

異様だ。茶髪の男はまずそう思った。

「“目が黒い”って…どういうことだ？」

一見、目が黒いというのは普通に聞こえる。ここではそんな人間はいないが、どこかの世界、日本という国がある世界では眼球が黒いらしい。厳密には茶色に近い黒なのだが。

しかし、この男は違う。目が黒色というのはそういう意味ではない。

言葉通り、『目が黒いのだ』

網膜が黒いのではなく、白目（眼球の外側）が黒いのだ。

異様。まさに異様。

普通に考えてこんな症状になる病気は存在せず、発生例もない。眼球が黒くなるなどありえない。

しかし、男の目は黒い。

かろうじて瞳孔部分は本来の色なのか、エメラルドのような綺麗な碧色をしているが、黒、碧と来ては綺麗と言うより禍々しいイメー
ジになってしまう。

「オレの事はどうでもいい。気にするな」

黒眼から碧色の眼光を発しながら、再び男は問う。

「薬：アルハザードはあるか？」

偶然にも、その薬の名はとある単語と同じ名を持っていた。

「…迷った」

前方は森、後ろも森。無論、左右も森。

聊か困った事態になってしまった。よもや配属初日から遅刻してしま
う事になるとは。

「おかしい…正確に道のりを歩んで来たはずなのだが、どこで間違
えたのだろう」

謎の動物の鳴き声、風で揺れる木の音が不安感呼び起こす。

辺り一面は暗闇で、遠くの光さえ見えない。今はまだ暗くなってい

通りすがりの男『こ、これは…もしや“道に迷ってしまったから助けに来てくれ”って意味か？そうだろうか？』

自分『おおおおお、うおおおおおッ』

通りすがりの男『そうか、そうなのか！！よし、わかった。オレがミッドチルダまで案内してやる！！付いてきなッ』

自分『おおおおおおおおおッ！！！！！！』

【ミッドチルダに露出狂出現！？ 奇声をあげる男性に迫るッ！】

……………。

……………。

「うむ……………」

結果的にはオーライであるが…これもニュースの一面を飾ってしま
う。

よって却下だ。

そもそも裸になる必要性がまったくないし、その男性が都合よく理
解してくれるとも限らん。

「……………ならば、これならどうだろうか？」

荒ぶる鷹のポーズをしながら、死にかけのクジラの鳴き声をすれば
…。

……………。

自分『オウツ…………オウツ…』

通りすがりの男『……………何してんだい、あんた？』

自分『オウウ…ウオ…オウツ…！』

通りすがりの男『…？』

自分『オオ…ウツ…………オオウツ…！！』

通りすがりの男『……………』

自分『オツオ…ウツ…オホツ…………ウオツ…！！』

通りすがりの男『……………』

自分『ウオオオオオツホツホッホー…………ウオツ…！！』

通りすがりの男『…わかったッ！！イきかけのおっさんのマネだ
な！？』

【ミッドチルダ七十一不思議が一つ!! 謎の喘ぎ声!? おっさんの声に迫る!!】

.....。

なぜ理解してくれないのだろう。

「これもダメか。いけると思ったのだが…あとは…そうだな、一人の銭湯でサウナに」

そうして解決策などを考えていると、

「…?」

今、少し…草むらが揺れたような?

気のせいか? いや、このチャンスが無駄にするべきではない。

人間ならばよし。動物ならばその後を追っていけばよし。通りすがりの男ならば尚よし。

完璧だ。

「.....」

音を立てず、気配を最小限に抑えながら音源まで近づいていく。

音からして物体は一個体ではなく、団体で行動しているようだ。時々聞こえる音は一体のものではないからだ。

多くて伍…少なくとも参と言ったところか?。

(しかし、ずいぶん早いな。オレでさえこの速度で音を発さずに移動するのに苦労するというのに、前方の団体にはまるで気配がない…)

「…む？」

物体の団体の動きが止まった？

「……………」

気づかれた？ いや、それならばこちらに視線を感じるはず。今現在、そのような気配は感じられない。よってここは何らかの理由で立ち止まったと結論つけるのが妥当だ。

自分に気配が向けられてないとなれば、ここは目標の確認をしておいてもいいだろう。

草むらからそっと、オレは顔のみを覗かせる。

「　　ッ！……！」

そこで見た姿は、動物でも、人間でも、通りすがりの男でもなく、

『じゃ……………機……………人……………六……………』

カプセルのような特徴的なフォルム……………中心にある赤い球……………これは、まさか……………。

(ガジェットだと！？)

資料でしか見た事ないが、あの特徴的なフォルムに見間違いはない。

まさかここでガジェットに遭遇するとは。
何かの作戦中なのだろうか、端末に映っている何者かがガジェット
へ向けて命令を下している。
秀困氣的に、話が終わるまであと数秒だろう。

(…考える、この場からオレはどうするべきか)

幸いな事に、まだあちらはこちらに気づいていない。よってこの場
から即座に離脱すれば戦闘、及び接触は避けられると想定される。
さらに敵機は六。発見されてしまえば一筋縄にはいかないだろう。
しかし、オレは仮にも管理局員。なったからには真つ当な仕事をこ
なすとしてしよう。
オレは端末を取り出し、本部に連絡を取ろうとしたが、

「…やはり、か」

端末からは不定期な乱れた音声しか聞こえず、通信が出来るような
状態ではなかった。

(電波が乱れている…あのガジェットが原因か…ならば応援は期待
できそうもないな)

やはり端末が使えなかったのはガジェットのせいだったか。となれ
ば、このガラクタのせいでオレは迷った事になる。
許しがたい。

しかし、電波が通じない故に応援はなし。あるのは自身のデバイス
のみ。
直接戦闘でしか方法はないようだ。

「……………早くも一発目を使う事になるとはな」

ゆっくりと、懐から一つの小袋を取り出す。そして透明の袋に入
たそれ（・・・）を、

「…っ」

一気に喉へ流し込む。水なぞいらぬ。あつたところで飲むわけに
もいかないが。

袋の中身の効果がなくなるのは30分後。時間的には十分だ。

「相棒！」

《はいよー》

草むらから一気に飛び出し、一瞬でガジェットの前まで飛ぶ。
やはり、この状態は楽だ。

腰に下げていた相棒を取り出し、オレは言葉を謂いう。

「与えられし試練へカラクリは何を思う？」

《それは善？ それは悪？》

ガジェットがこちらに気づいたのか、一斉に飛びかかってきた。
その数はオレが予想した数とはまったく違う…軽く20体はいつて
いる。流石に機械の気配までは完ぺきに読み取ること出来なかつ
たらしい。

と、邪念をしているうちに、目の前が少し暗くなった。
ガジェットが目と鼻の先にいた。

ああ、もうこんな近くまで来ているのか。

「お前はそこで何を思う?」

近くまで来ていたのなら、

斬るだけだ。

その名の通りに。

相棒：『ファントム【 】の名のもとに。

オレ：ニア・ロンメルは行く。

善悪を見極め、人間を正しい方向へと導くために。

オレは

「もう一度言おう。カラクリに言葉が分かるはずもないが、一応だ」

ガジェットは言葉を発さない。ゆっくりとこちらに攻撃を仕掛けようとしているだけ。話すだけ無駄? 知っている。だから一応と言った。

これが最後だ。

「お前は、そこで、何を、思う?」

刹那、暗くなっていた視界が上下に分かれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4673v/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~あなたはその時何を思う?~

2011年10月9日04時26分発行